執 筆 補 助 事 業

「被 爆 体 験 記 集」

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館

被爆体験記

標題	執筆者	被爆時 年齢	ページ
原爆に二人の娘を奪われて	藤井（ふじい）　マキエ	２２	1
九死に一生を得て	島崎（しまさき）　治郎（じろう）	１４	7
私の被爆体験記	田中（たなか）　常松（つねまつ）	３１	１５
母への想い	川口（かわぐち）　弘子（ひろこ）	8	２３
忘れたくても忘れられない あの夏の出来事	下竹（しもたけ）　千代子（ちよこ）	２４	３１
よかったのう	宮地（みやち）　稔雄（としお）	２７	３９
平和の思いを次世代に	前土居（まえどい）　時男（ときお）	１２	４７
消えない戦争の傷	藤恵（ふじえ）　京子（きょうこ）	9	５５
私は地獄を見た	桑原（くわばら）　君子（きみこ）	１７	６５

原爆に二人の娘を奪われて

藤井（ふじい）　マキエ

●被爆前の状況

私たち一家が住んでいたところは、横川町（よこがわちょう）一丁目の横川橋から１００メートルくらい東の川土手でした。当時私の家族は、主人（清司（きよし））と私、三才の長女（和子（かずこ））、生後半年の次女（清美（きよみ））の四人家族でした。

被爆前のことでよく覚えていることは、空襲警報のサイレンが鳴るたびに私は二人の子供を連れて、地下に掘った穴に逃げていました。そんなことが何日もありました。

●被爆の状況

８月６日の朝、当時主人に召集令状が出されていたので、その日主人は会社を休んで家にいました。私と子供たちは空襲警報が解除になったので、家の２階で鬼ごっこをして遊んでいました。

突然窓からバッと熱い火の玉が入ってきました。その瞬間私たち親子は地の底に吸い込まれるように落ちていきました。

私の足元の下の方で長女が「お母ちゃんここよ、お母ちゃんここよ」と叫んでいました。私は「和子ちゃん、お母ちゃんが助けに行くからがんばって」と声をかけましたが、壁土や家のいろいろな物にはさまって首を動かすこともできませんでした。

そのうち上の方から私の名前を呼ぶ主人の声がしました。「マキエはどこかー、どこかー」とあちらこちら歩き回って探しているようでした。しばらくすると、熱さを感じるようになりました。そして、上の方で「もう火の手も上がった。こんなに探しても分からないのだから、こらえてくれ、あきらめてくれ」と主人が力なく叫んでいました。

私は「ここよ、お父さんここよ」と言うのですが、主人は私のいるところが分からなかったようです。私は次女を抱いたまま下敷になっていたのですが、主

人のそのあきらめてくれという声を聞き、必死で次女を抱きしめました。その時に指で鼻と口をふさいでしまったので、子供が息ができなくなり、もがき苦しみ「ギャー」と泣きました。私はその声に驚き、「子供が死ぬー」と叫びました。その声が聞えたのか、主人が戻ってきたようです。そして「どこだ、どこだ」と一生懸命探してくれました。そして主人が小さな穴をあけて先に私を出してくれ、次に次女を引っ張り出してくれました。私は頭を打っていたのでめまいがして、立っていられませんでした。まわりはボウボウと火が迫っていました。

しばらく逃げてから、私は、はっとして、「お父さん、和子は、和子は？」と聞いたら、主人は「和子はもうダメだ。動かなくなってしまった。こらえてくれ」と言いました。

私は心の中で「和子ちゃん、ごめんね。ゆるして、ゆるして」と謝りながら歩きました。

主人は片手で次女を抱きかかえ、もう片手で私を支えながら引きずって逃げてくれました。その間主人は「しっかりしろ、しっかりしろ、がんばれ、がんばれ」と言って力づけてくれました。私は目もかすんでいるし、主人について逃げるだけで精一杯でした。家は四方八方から火が迫っていたので、跡形もなく焼けたと思います。

主人も両手に私と次女を抱いてますから、少し行っては休み、行っては休んだりしていました。その途中、髪を振り乱した女の人が、主人の足元にすがって「助けてください。娘が柱の下敷きになって出せないのです。助けてください」と言って、助けを求めてきました。それで主人は、「助けてあげたいのですが、家内も子供もこういうような状態ですので許してください」と言って断っていました。そしたらその女の人は飛んで走って行ってしまいました。それから休んでは歩き、休んでは歩きして、新庄（しんじょう）にある主人の知人のお宅に着いたのが夕方でした。

●新庄のお宅で

新庄のお宅で三日ほどお世話になりました。私は被爆のショックで、お乳が出なくなってしまいました。私は足を痛めて寝ていたので、主人がお乳をもらいに出かけていました。

私は、家の下敷になった長女がもしかしたら助かっているのではと思わずにはいられませんでした。助けを求める長女を置いて私は助かったと思えば、もう腹が煮え繰り返るような気持ちで、涙が止まりませんでした。

新庄のお宅にいる間、火傷(やけど)をしてヨロヨロと歩いていくたくさんの人たちの列を見ましたが、その姿を見ているうちに私も涙が出てしかたなく、目をつむって見ないようにしていました。

●山口の実家へ

三日ほどしたら汽車が動くようになりました。それで私と主人と次女は横川駅から満員の汽車に乗って、私の実家のある山口県の小串(こぐし)というところに行きました。やっとたどり着き、実家まで歩いて帰りました。その途中、町の人たちが私たちが通るみじめな姿を見て「どうしたのか、どうしたのか」と言っていました。小さい町ですから私たちも顔なじみでみんな知っているところなのです。もう私は声もなく、ただ涙を流してそこを通り過ぎて実家にたどり着きました。

そしてその晩から私は、長女を放って助かったことがすまなくて、寝られない夜が続きました。そうしたら私が自殺でもするんじゃないかと思って、姉と母親が両側に寝てくれました。そっと夜中に家を出て、「許して、許して、この親を許して」と叫ぶ毎日でした。私が山口にいる間に主人が広島に戻って、長女の遺骨を探してくれました。

それから、まだ私のお乳が出ないものですから、母が近所の若い赤ちゃんが

いる人のところへ行って、乳をもらい歩いてくれました。そして母が、「お前は足が悪くて寝たままだし、赤ちゃんもいることだし、ゆっくりして養生してお帰り」と言ってくれまして、一年近く実家で過ごしました。足が悪いのは今でも続いています。

●次女の死

山口に行ってから、一年足らずくらいで広島に戻りました。横川の元の家の近くに家を借りて住んでいました。

主人が次女を銭湯に連れて行っていたのですが、ある日、男の人が次女を見て「背中のほうがちょっと腫(は)れているのじゃないか」と言ったそうです。それで原爆のときに背中を打ったのかもしれないと思い、病院に連れて行きました。診断してもらうと、背中の脊髄(せきずい)の骨が四本膿(う)んでいました。そこで再び山口の実家で娘を看(み)てもらうことになったのですが、何年かすると娘が「お父ちゃん、お母ちゃん」と言うようになったものですから、広島に連れて帰り、入院させました。治療費には苦労して、実家の母親の世話にもなりました。とうとうお金も払えなくなったので、家に連れて帰りましたが、昭和２７年に亡くなってしまいました。

●平和への思い

戦争はもうしてほしくないです。世界中がお互いに手をつなぐような世の中になってほしいです。お互いを思いやる気持ちで毎日を過ごすことができたら、どんなに幸せなことだろうと思います。

九死に一生を得て

しまさき　じろう
島崎　治郎

九死に一生を得て

氏名　島崎（しまさき）　治郎（じろう）（被爆時満１４才）

当時の職業　学生（広島県立広島第二中学校３年生）

被爆当時の住所　広島県賀茂郡（かもぐん）西条町（さいじょうちょう）

被爆場所　広島市南観音町（みなみかんのんまち）総合グランド附近

■８月６日の様子

私は当時、西条から汽車、市内電車を乗り継ぎ１時間以上かけて南観音町の三菱（みつびし）重工業㈱広島機械製作所へ学徒動員のため通勤していました。私は、５人きょうだいの４番目。兄１人、姉２人、下に妹がいます。兄は九州の軍隊に出ていました。

私が二中（広島県立広島第二中学校）の２年生の時から、授業はなくなり、あちこちの工場に回されました。昭和１９年の終わり頃から三菱の観音工場へ通勤するようになりました。

８月６日当日は、学友、４、５名と工場へ向かう途中被爆しました。場所は、南観音町の総合グランド附近だったと思います。爆心地から約４キロの距離です。もし私が一本遅い電車に乗っていたら原爆投下時刻には、電車の中にいて相生橋（あいおいばし）で直爆死していたでしょう。九死に一生という感じです。

被爆の瞬間は、背中からピカッと光を受けました。首が熱かったことを覚えています。そして強烈な爆風の後、私はひっくり返り気を失いました。気絶して５分ぐらいで目を開けました。見まわすと、爆心地から４キロ離れているのに工場は鉄骨だけ残り、屋根が吹き飛んでいました。

一体何が起こったのだろうか。動員先の工場がＢ２９の爆撃を受けたのではないか。いや、Ｂ２９の爆撃を受けたのではなく、あれは、皆実町（みなみまち）のガスタン

クが爆発したのではないだろうかと学友の中でも意見が分かれました。警戒警報は解除になっていたはずです。８時１５分は、無警戒の状態でした。８時前に空襲警報は１回ありましたが、警戒警報に変わり、８時５分くらいに警報が解除されました。解除のサイレンも聞きました。

その後、「市内が全部、大火事になっているから、とにかく今日は、来た者は自分の家に帰りなさい」という指令が出ました。黒い雨が降るなか東へ進みました。江波(えば)へ渡り、吉島(よしじま)、千田(せんだ)へたどり着き、さらに比治山(ひじやま)方面へ御幸橋(みゆきばし)を渡りました。御幸橋を渡る時、たくさんの人に足を引っ張られました。「水をくれ、水をくれ」と言っています。私は人が、けがをしているなとぐらいにしか思いませんでした。なぜならどうしてたくさんの人がけがしたりヤケドしたりしているのかまだ見当もつかなかったからです。「お兄ちゃん、水くれ、水くれ、けがしたから、のどが…」と引っ張られても恐ろしいばかりでした。私は幸いにも被爆時に負傷がなかったので、多くの傷ついた人を目の前にして、ただ狐(きつね)につままれたような足取りで進むしかありませんでした。

比治山の下を通った時、記憶に残っているのは真っ赤な体の兵隊さんです。全部皮がたれさがっていました。息はされていたのですが、それはむごい姿です。私を見て死体を指さし「これ、リヤカーに乗せて運ぶので、お兄ちゃん、足の方、ちょっと持ってくれ」と言います。私は、こわくて、できませんでした。比治山の下のあたりは、爆心地から離れていたためか、大けがを負わなかった人が多く、多くの人が死体を運ぶ手伝いをしていました。その兵隊さんは数日中に亡くなられたのではないでしょうか。

やっとのことで夜中の何時か分かりませんが、海田(かいた)の駅にたどり着きました。海田から夜中に一回、西条方面へ汽車が出るかもしれないという情報があり、１時間以上も待ったでしょうか。汽車に乗ることができました。ギュウギュウ詰めで西条に到着したら真っ暗闇(やみ)で誰(だれ)が迎えに来ているのか分かりません。灯

火管制の時代、電気や灯(あか)りをつけることが許されない時代でしたから、「大変だったね、大変だったらしいね」と言って迎える声ばかりで誰が迎えに来ているのか分からない状況でした。

■７日以降の様子

おじが比治山で働いていて被爆したらしいということで、おばと一緒におじの捜索へ広島に入りました。トラックに乗って向かったのか、どうやって市内に入ったのか記憶はあいまいですが、宇品(うじな)の方へ収容されているらしいとの情報を頼りに７日の夜明けぐらいから出かけました。私は二中に３年間通ったおかげで市内の地理は頭に入っています。おばの道案内をしなければと思いおばと出かけたのです。

宇品の収容所でおじを見つけることができました。収容所は宇品の港に近い倉庫だったと記憶しています。兵隊さんが「あっ、この人、今、息絶えちゃった。これ出しましょう」と渡り廊下へ遺体を並べていきます。また兵隊さんが「人が死なれたからちょっと、頭の方を持ってくれ」と私に言います。私はこわくて手伝えませんでした。２、３人で組んで息絶えた人を廊下へ出していくのです。２０歳ぐらいの娘さんでもヤケドで真っ黒になっていたのですが、丸裸で寝かされていました。

宇品から西条までおじを連れて帰りましたが、３日後の１０日に亡くなりました。家の近くの焼き場で焼きました。私も手伝いました。おばは、２年前に亡くなりましたが、おじとは９年しか連れ添えなかったということでした。

■被爆後の生活

二中での授業が再開されたのは、１０月末か１１月に入ってからだったでしょうか。観音の元の二中があった場所に掘立て小屋を作って、雪が舞い込む、

暖房がない中、震えながら授業を受けたのを覚えています。窓ガラスもない建物でした。観音に戻る前までは、海田の女学校校舎を借りたり、壊れていない小学校を借りて授業をおこなっていました。

私は進学を希望していたので、授業を受けないと単位がもらえません。寒いのを我慢して授業を受けました。掘立て小屋でも授業を受けられるだけありがたいと思ったものです。卒業は、旧制中学校のため５年生で卒業しました。昭和２２年のことです。卒業後、千田町の広島工業専門学校へ進学しました。

工業専門学校を卒業後、自動車が少しずつ世の中に普及するようになった昭和３０年代、自動車教習所をつくろうと思いました。知人と一緒にシャベルを持ってコースをつくるところから始めました。工業専門学校で取得した単位を生かして、学科と実技の教官になるための資格を取りました。昭和３５年から、市内の自動車教習所に勤め、主任教官をしました。

昭和４１年に私は自動車教習所を辞めました。兄から老人ホームなどを経営したいので私に手伝ってほしいとの申し出があり、兄の事業を手伝うようになりました。兄は、医師会長まで務め、私は兄を誇りに思っています。兄ひとり、弟ひとりで経営をやってきたのに兄は、脳の血管が破れて亡くなってしまいました。残念で三日三晩眠れませんでした。宮島（みやじま）や湯来（ゆき）の施設を飛び回って、長い距離は、私が運転して病院長の兄を連れて行ったものです。私が運転しないといけないと、使命感を持って兄を支えてきました。兄は学問一筋で私はスポーツマン、二人三脚でやってきました。兄が亡くなったことは本当に、本当に残念です。

■就職や結婚、後遺症について

私は、妻と結婚してもう少しで金婚式を迎えます。結婚の時、自分が被爆者であることを言うことは敬遠していました。被爆者への差別については心得て

いたので、私は、妻にはあえて自分から「原爆にあったのは、あったけど、三菱で働いていて５キロ先南観音の端の方でちょっと受けて、けがも何もしてないよ」と言っていました。妻は、気にしていないようでした。息子は薬剤師をしていますが、知識もあるし、自分が被爆２世であることを自覚しています。息子や娘が誕生した時は、少しは心配しました。異常がないのをそおっと確認しました。

後遺症として心配したのは、被爆して１０年もたって、首の後ろにコブができたことです。悪性ではなく良性の新生物と言うのでしょうか。大きなコブができました。コブができた場所は、被爆時後ろから光がきて、そのちょうど光が当たったところでした。手術してコブを取ってもらいましたが、また１０年後コブができたのです。それから最近はもうコブはできません。コブができた以外に被爆したことが原因かと思われる症状は、歯が人よりも早く弱くなったことです。人によっては、髪が抜ける人もいるでしょう。人によってその症状は違います。私は、髪は抜けませんでした。ただ、みんなに共通して言えることは、被爆者はとにかく疲れやすいことです。就職した時、他の人と同じ仕事をしていても疲れやすい、上司に横着しているのではないかと疑われます。「みんなはこれぐらいの仕事をして疲れないのに、あんたこれぐらいで疲れていたのでは、横着者じゃあないか」と叱られるのです。疲れやすいことは、仕事をする上ではとても不利なことです。

■平和への思い

若い世代に原爆や平和とは何かを伝える時、語る側の工夫も必要だと思います。原爆の瞬間は、アッという間に建物が倒れて、アッという間に人が亡くなった。それを伝えるために工夫しなければならない。ただ「大変だった、大変だった」「水くれー言うのを水やらずに心残り。橋の下に火が迫ってくるのをそ

のまま逃げました」と言うだけでは、聞く方に伝わっていないと思うのです。「平和公園には資料館があります。行ってみてください。平和の木があります」と言うばかりでは原爆のむごさを伝えたことになりません。もしかすると聞く側にとって、原爆は、たいしたことではないのではと思わせるかもしれません。先日、北海道で竜巻が起こり多くの方が亡くなりました。映像で見るとまさに原爆の瞬間に似ていました。現実味を帯びた強烈な映像でした。小さな子でもあの映像で伝わるのではないでしょうか。原爆もあのように瞬間的に倒れ、燃え上がり２０万もの人が亡くなったことを現実に起こった災害からも伝えられることではないでしょうか。

原爆投下後まもなく、毎日新聞や朝日新聞のプロのカメラマンが広島へ入って惨状をカメラに写しています。戦地へ何度も赴いている彼らさえも広島の原爆ほど悲惨なものは他の戦地にないと言っています。その悲惨さを伝えていくにはどうすればいいか。私は、伝える者の伝え方を工夫する必要があると思います。

最後に、私は二中に在籍していたため、多くの下級生を原爆で失いました。また、最近、亡くなった同級生もいます。たった一人の兄も亡くなり、ひとりぼっちになった気持ちです。現在私は、体が不自由で妻に介護してもらっています。あと、２年は生きたい、そして、１週間に１回でも、２週間に１回でも、小さい子でもいい、小学生でもいい、思いっきり自分の今までのことを語ることができて最期を迎えることができれば一番幸せと思っています。

私の被爆体験記

田中（たなか）　常松（つねまつ）

●当時の生活

当時、私は３１歳で、小町の中国配電㈱（現中国電力㈱）に勤め、妻のミキエと２人の子ども（長男３歳、長女７か月）とともに大手町の借家に住んでいました。中国配電には、尾道中学校を卒業した後、昭和９年２月に車の免許を取得してから入りましたので、２０歳か２１歳くらいだったと思います。中国配電に勤めている間に、昭和１２年９月から１６年１月と１７年９月から１８年１１月の２回招集され、招集と復職を繰り返す状況でした。

昭和２０年３月の終わりごろ、呉でひどい空襲があり、艦上機がたくさんトンボのように飛んでゆくのがよく見えました。前に住んでいた人が掘ったのでしょうが、家の床下に穴が掘ってあり、空襲のたびに逃げ込みました。しかし、子どもは２人ともまだ小さく３歳の子と７か月の子ですから、防空壕に逃げ込んでも、一人を見ているともう一人が外に出ようとするので大変でした。これはもう長くはもたないと思い、妻と２人の子どもを双三郡和田村向江田（現三次市向江田町）にある妻の実家に疎開させたのが、３月末のことです。当時のことですから、家財道具は会社の倉庫に預け、体一つで疎開させました。

妻子を疎開させた後、私は、会社の倉庫に住んでいました。しかし、５月の初めに、私が土曜日と日曜日を利用して妻の疎開先に行き、帰ってみると、住んでいた倉庫に爆弾が落ち何もかも焼けていました。着替えもなくなっていたので和田村にとって返し、浴衣からシャツやパンツをつくってもらい、月曜日の朝一番の汽車で出勤しました。住むところもなくなったので、会社の同僚の紹介で牛田町にある家に間借りすることになり、そこで被爆するまで生活しました。

●被爆の状況

当時は、警備招集といって、夜に空襲警報が出た場合は、市役所からの命令

で作業服を着て警備に出なければなりませんでした。在郷軍人が手分けをして対応するのですが、８月５日の夜も空襲警報があり、私は、自分の担当する柳橋（やなぎばし）の警備に出ました。警備に出た翌日の出勤時間は通常の８時が８時３０分になるのですが、その伝達がなく、翌６日、私は８時に会社に出勤しました。結果的には、それで助かりました。

勤務まで３０分あるので、地下にある職員用の風呂（ふろ）場で、昨夜着た作業着を洗濯していた、その時です。洗濯のためかがんでいたのですが、突然、前のほうから来た爆風に吹き飛ばされ、後ろの壁にぶつかり気を失ってしまいました。ピカッと光ったこと以外は何も覚えていません。気がついたとき周りはホコリのため真っ暗でしたが、４階か５階のあたりに火の手が見えたので、これは何とかしなくてはいけないと思い、意識がはっきり戻りました。ホコリで一寸先も見えない中、記憶を頼りに手探りで進み、このあたりが階段と思って進むと何かにぶち当たるといった状況の中、ようやく建物のほとりにある守衛所のところに出ることができました。守衛所からは電車道が見え、電車道に出ると電車は横になって民家にぶち当たっている状況で、これはおおごとだと思いました。どこへ逃げようか、誰（だれ）かに聞こうと思っても誰（だれ）もいませんでした。

私たちの避難場所は、会社の南にある一中（広島県立広島第一中学校）のグランドでしたが、私は、それを聞いていなかったので、電車通りを北に向かい、白神社（しらかみしゃ）の手前を右に曲がり、竹屋町筋（たけやちょう）を東の方へ向かいました。途中、県女（広島県立広島第一高等女学校）の塀が爆風で道路に押し倒されており、娘さんかおばさんかわかりませんが、女性の方が下敷きになり首から上だけを出し、助けを求めていました。しかし、そのときは、自分も血を流し、背中のほうはガラス片が刺さり血でべったりの状況で、逃げるのが精一杯でした。

そして、竹屋川に沿って南に下り、御幸橋（みゆきばし）に向かいました。竹屋川（たけやがわ）と言っても小さなどぶ川で地図にも載っておらず、福屋（ふくや）の地下を通っていました。逃げ

る途中は、ほかに逃げている人は見ませんでしたが、竹屋川をはさんだ向こうの家で、おおごとだと言いながら片付けをしていたように思います。何時ごろのことかわかりませんが、かなり時間が過ぎていたのかも知れません。

御幸橋をわたる手前で、軍隊のトラックが来たのでそれに乗せてもらい宇品(うじな)港に行き、そこから船で似島(にのしま)に避難しました。似島には、多くの負傷者が避難しており、大変な状況でした。衛生兵はいましたが、包帯を巻いてもらったぐらいで、治療らしい治療を受けることができず、背中にはガラス片が刺さったままでした。気が狂ったような人、泣き叫ぶ人やそれをやかましいと怒る人、夜になっても人が寝ているところを走り回る人、それを怒る人などやかましくて寝ることもできませんでした。６日は何も食べず、７日朝、竹の筒でおかゆをもらい梅干しを一つ入れて食べました。似島での食事はこれだけでした。

こうした状況なので、これでは死んでしまうと思い、軍隊の人に帰らせてもらいたいと頼み、７日の朝には船で宇品港に戻りました。幸いなことにトラックがいたので、乗っていた将校さんに「どこに行きますか」と尋ねると、「市役所に行く」ということでした。「市役所まで乗せて下さい」と言うと「乗れや」と言うので市役所の表の玄関まで乗せてもらい、お礼を言って降りました。会社は市役所の少し北ですから、歩いて行きました。会社に着くと知っている職員が２人受付にいましたので、「今から三次の家内の里に疎開する」と伝え、住所を教えました。そして、紙屋町(かみやちょう)、八丁堀(はちちょうぼり)を通って牛田町の下宿先まで歩きました。そこで１泊して８日に戸坂(へさか)駅から汽車に乗り、妻子が疎開していた和田村に向かいました。妻が心配しているだろうから、一時も早く帰らなければいけないと思い急ぎました。途中の様子はよく覚えていませんが、工兵橋のところに死体がたくさん詰まれていたことは強く印象に残っています。

●被爆後の状況

和田村に着いたときは、背中にはまだガラス片が刺さったままでした。毎日、川に行って妻に背中を洗ってもらいました。背中には血がコールタールのように固まってこびりついており、妻が針でその血の塊を取るとガラスの破片が一緒についてきました。川で妻に固まった血とガラスの破片を取ってもらう日が１週間も１０日間も続きました。もう全部取れたと思っていましたが、残っていた破片が昭和三十何年かに化膿(かのう)して、堺町(さかいまち)の外科病院で出してもらいました。

和田村に着いてしばらくして、ガラスを全部抜き取りもう安心という状況になる前のことですが、私の父が尾道から訪ねてきました。尾道には連絡ができずにいましたので、父は私が生きていることを知らず、私の葬式をどちらで行うか相談に来たのです。私が生きているのを知り、喜ぶと同時に大変驚き、縁側で番茶だけを飲んですぐ尾道に帰りました。

和田村では、内臓に異常を感じることもなく割と元気に過ごし、３週間くらい養生して８月の終わりか９月の初めに広島に帰り、職場に復帰しました。

職場に復帰してしばらくして、栗(くり)の実が落ち始めたころなので９月の中旬だと思いますが、下血があり私の実家の尾道に行き養生しました。下血をするので、みんな、お医者さんも赤痢だろうといって隔離するかどうかという話にまでなっていましたが、姉が栗(くり)ご飯を炊いてくれて、それを食べて下血が止まりました。不思議なようですが私はそう思っています。尾道では食事もよく、４・５日養生し、元気になったのでまた広島に帰り職場に復帰しました。

●終戦後の生活

職場に復帰したときは、住むところをなくした職員も多くおり、会社の５階で共同生活をしていました。最初は自分たちで食事をつくっていましたが、後に食事をつくってくれる人を会社が雇ってくれました。

仕事の内容は、自動車が運転できましたので、総務部の資材課でトラックを運転し、資材を県内各地の発電所などに運んでいました。

昭和２１年に家族が帰って来て一緒に住むようになり、会社の同僚が、仕事が終わった後、柱を買ってきたりして榎町(えのまち)に家を建ててくれました。榎町にはそれから３０年住みました。

苦労は色々ありましたが、食べ物については、妻の実家から米をもらうことができたので、あまり不自由はしませんでした。しかし、着るものやふとんは会社の倉庫に入れておいて全部焼けてしまったので、何もありませんでした。浴衣を縫い直して下着にしたり、尾道からふとんをもらったり、みんなの世話になりながら、一からやり直しました。

●健康について

昭和２２年７月に次女が生まれましたが、やはり、原爆の影響が心配でした。まだ幼稚園の時に、鼻血が出て止まらなかったり、他の子とちょっと違っていたりすると、原爆の関連かと思ったこともあります。

自分のことでは、昭和３１年に腫瘍(しゅよう)の一種ですが結核腫(しゅ)になり白血球が２０００、少ない時は１０００まで減りました。体重も６５キロあったのが８キロぐらい落ちました。昭和３１年７月から３２年９月までの１年３か月、廿日市町(はつかいちちょう)（現廿日市市）原(はら)にある病院に入院し、会社も２年間休みました。７月７日、ちょうど七夕の日に入院したのですが、朝ご飯のとき小学校２年生の娘が「お星様は今日は会(お)うてんじゃないん。でも、お別れじゃね」と言うので、みんなが涙を流しました。

それ以降は、大きな病気もせず元気でいましたが、十何年か前から下血をするようになり、日赤病院に血が止まるまで入院したり、止血の注射をしてもらったりしています。

４年前には前立腺（ぜんりつせん）ガンの手術を受け、そのときに認定被爆者の認定証をもらいました。

●今、思うこと

現在９４歳になりますが、これまで生きてこられたことにただ感謝しています。妻のおかげだと思っています。また、子どもたちにもよくしてもらっています。感謝ばかりです。

母への想(おも)い

川口(かわぐち)　弘子(ひろこ)

●８月６日以前の様子

当時、私の家は、上天満町にあり、母、兄、姉、私の４人家族でした。父、面家利男は、昭和１３年に中国で戦死しました。父が戦死した時、私は幼かったので、父の顔は写真でしか知りません。家に飾ってあった父の写真を見ては、「お父さんのゲタを持って行ってあげないから、写真から出てこられないのよ」と言っていたそうです。

母、静子は女手一つで私たちを育ててくれました。人一倍教育熱心で、戦時中でも習字やバレエなどを習わせてくれ、兄が中学の入学試験を受ける時には、毎朝お百度参りをしていました。夫が亡くなり、「子供たちに残してあげられるものは、教育しかない」と考えていたようです。

そのため母は、毎日朝から晩まで、いくつもの仕事を掛け持ちして働いていました。朝の新聞配達の時は、兄や姉も母を手伝い、私も小さかったですが、家族の後をついて歩いていたことを覚えています。

母は毎日忙しく働いていましたが、同じ町内には叔父一家が、近くの広瀬元町には祖父一家が住んでおり、また当時は近所が皆、親戚のような付き合いをしていましたので、周りの人たちが私たちの面倒を見、助けてくれました。

そのころ、多くの国民学校では、集団疎開や縁故疎開が行われていました。当時天満国民学校の３年生だった私も、同じ学校の６年生だった姉のスミヱと一緒に、湯来町のお寺へ集団疎開をしていました。毎週母と兄の敏之が、芋など持って面会に来てくれましたが、幼い私たちにとって、親元を離れた生活はとてもつらいものでした。母が「死ぬのなら親子一緒に死のう」と言うので、私も「もう帰りたい、帰りたい」と言って、上天満町の家に帰ってきました。今思えば、あのまま疎開先に残っていたら、母や兄も面会に来ていたでしょうから、皆、助かって元気でいたのかも知れません。

●８月６日の様子

８月６日、私は学校が休みだったので、友達と近所に出かけていました。

上空をＢ２９が、飛行機雲をひきながら飛んでいるのを見て、とっさに両手で目と耳をふさぎました。当時、爆弾が落ちたと思ったら、目と耳をふさぐよう訓練されていたので、無意識にそうしたのだと思います。目をふさいでいたため、閃光（せんこう）は見ていません。

ちょうどその時私がいた場所は、運よく家の軒先だったため、壁の影になり無傷で熱さも感じませんでした。一緒にいた友達も、少し頭にケガをしただけなので、私たちは家のすき間から自力ではい出し、家に帰りました。

家に帰ると、被爆し傷を負った母が私を待っていました。その日、母は米の配給を受け取りに出かけて、自宅に戻る途中で被爆しました。母はすぐ、家の中から救急袋だけを持ち出し、私を連れて逃げました。

周りを見ると、家屋が倒壊し、橋の欄干も燃えていました。その橋を渡って、己斐（こい）の方へ向かいました。逃げている途中、真っ黒に焼け焦げた人が「お水ちょうだい、お水ちょうだい」と助けを求めてきましたが、その時は、逃げることに必死で何もできませんでした。あの時、その人の名前だけでも聞いてあげればよかったと、今でも後悔しています。

やっとの思いで己斐国民学校に着き、気が付いたら私は裸足（はだし）でした。ガレキの中を逃げて来たのに、よくケガをしなかったと思います。

学校は、教室も廊下も負傷者でいっぱいでした。そこで、母のケガの手当てをしてもらいました。母は、手、足、背中に大ヤケド、顔にも少しヤケドを負い、そして頭は大きく陥没していました。薬を少し付けてもらっただけで、治療は終わりましたが、今思えば、本当に薬を付けてもらったかどうか、定かではありません。

それから母と一緒に、町内で指定されていた小河内町（おがわちまち）の避難場所に向かいま

した。避難場所に着くと、空から黒い雨がふってきたので、近くに落ちていたトタンを持って来て、雨をしのぎました。雨が上がりしばらくすると、兄の敏之がやって来ました。

当時兄は、松本工業学校２年生で、宇品(うじな)沖にある金輪島(かなわじま)の工場に、学徒動員されていました。友人と一緒に動員先に向かっている途中、御幸橋(みゆきばし)付近で被爆しましたが、私たち家族のことが心配で、動員先には向かわずすぐに自宅に引き返したそうです。広島電鉄の本社があったあたりは、両側が燃えて通れないので、修道中学の方に向かい、元安川(もとやすがわ)と太田川(おおたがわ)を舟で渡り、次に橋を渡ってお昼ごろやっと観音町(かんのんまち)に着いたそうです。その途中のことですが、幼稚園がつぶれて建物の下敷きになっていると、助けを求められましたが、助けることが出来ませんでした。兄は、一刻も早く家族の安否を確かめたい一心で、急いでいたのです。かわいそうなことをしたと言っていました。

帰ってみると、家のすぐ側まで火の手が迫っていたので、すぐに防火バケツを使って、その火を消し止めたと後から聞きました。それから家にだれもいなかったので、私たちを捜しに小河内町に向かい、無事に再会することができました。

姉は、６日の朝「学校には行きたくない」と言っていたそうです。しかし母は、姉が山中(やまなか)高等女学校に進学するよう考えていたので、学校を休むことを許しませんでした。その日の朝も母は、いつもと同じように姉を学校へ送り出していましたが、姉は帰って来ませんでした。

●７日以降の様子

翌日、兄は帰ってこない姉を捜しに、天満国民学校へ行きました。兄は、当

日姉が校長室で掃除をしていたと聞き、辺りを捜したそうですが、校舎はぺちゃんこにつぶれており、すべてが灰と化していた焼け跡には何もなかったそうです。

母と兄と私の３人は、２日か３日小河内町の避難場所にいましたが、母が姉のことを心配するので、家へ戻ることになりました。

家に戻ってからの母は、ずっと寝たきりで、ケガの手当ては、己斐国民学校で薬を付けてもらった１回きりでした。

運良く我が家は焼け残っていたため、近所の人たちが我が家のふとんを持ち出し使っていました。その様子を見た、叔母の面家末子（おもやすえこ）は「どうしたの！？皆にはふとんをあげているのに、なぜ自分の親には掛けていないの」と怒りました。兄はまだ工業学校２年生、私も国民学校３年生ですから、今で言うと中学生、小学生に当たる年齢です。子供だけでは何も出来ませんでした。叔母が来てくれてからは、叔母が母の看病や私たちの世話をしてくれました。叔母の家では、父の弟にあたる夫の繁男（しげお）が山口の部隊に召集されていましたが、妻と娘信枝（のぶえ）が広島にいるという理由で、２日後には広島へ帰っていました。叔父や叔母がいなければ、子供だけなので、大変なことになっていたと思います。

母の顔にできたヤケドは、早く治って喜んでいましたが、背中のヤケドはなかなか治りませんでした。背中のヤケドは乾いて治ったと思っていると突然、皮がずるっとむけるのです。皮の裏は、ウジ虫で一面いっぱいでした。気付かないうちに、背中にウジ虫がわき、背中にびっしりと付いていて、取れるものではありませんでした。母は蚊帳で寝て、私と兄はその側で寝ていましたが、私は、ウジ虫がわいた臭いにおいばかりが気になっていました。

母は、あんな大ケガを負っていましたが、「痛い」とか「かゆい」とか一切言

わず、水も欲しがりませんでした。ただ、「桃が食べたい、桃が食べたい」と言うので、井口(いのくち)の方へ叔母が、買いに行ってくれました。今考えると、やはりのどが渇いていたのでしょう。

９月４日の朝方、母が亡くなりました。叔母に「まぁ、あんた、お母さんはもう死んでいるじゃない」と言われて初めて、母が亡くなったことに気付きました。それまで私も兄も、まったく気付きませんでした。今思えば、頭が割れて大ケガをしていたのに、よく１か月も生きていたと思います。兵隊さんが負傷者をトラックに乗せ郊外に避難させていた時も、母は姉の消息がわかるまでは絶対家から離れようとしませんでした。母と同じ様に負傷した人で、郊外で治療を受け元気になった人もいました。母は、ただ帰らぬ姉のことが心配で、姉に会いたい一心で生きていたのだと思います。

母の遺体は、亡くなったその日に、家族で向西館(こうせいかん)の跡地に行って焼きました。でも、悲しいという感情もわかず、涙も出ませんでした。すでに感情が麻痺(まひ)していたのだと思います。その日は雨がふり、母の遺体はなかなか焼けませんでした。

市内は、建物がすべて倒れ、一面焼け野原となり、家からは広島駅や似島(にのしま)が一望できました。いたる所に死体があり、川の死体は、兵隊さんが引き上げて焼いていました。１か月以上もそのままにされた死体もあり、私たちは平気でそこを行ったり来たりしていました。また当時は、原爆というのも知らず、食べるものもなかったので、よその畑でできた芋や土に埋めてあった米など被爆した食べ物を平気で食べていました。

●被爆後の生活

私たちは、母が亡くなってからすぐ、親戚(しんせき)を頼って緑井村(みどりいむら)へ行き、親戚(しんせき)の納

屋に置いてもらいました。祖父母たちは、もう先に行っておりました。原爆が投下された時、祖父の面家留吉（おもやとめきち）と祖母のマツノは、自宅の茶の間にいて無事でした。しかし、緑井村に着いた時は元気だった祖父も急に体調を崩し、母が亡くなった５日後に亡くなりました。祖父母と一緒に広瀬元町で生活していた叔父の昭三（しょうぞう）も、自宅の玄関に居たそうなのですが、まったく消息がわからなくなっていました。

緑井村では、今までの生活と違うので戸惑うことも多くありました。１年ぐらい緑井村の学校に通い、その後、広瀬に帰ってきました。皆で力を合わせて、家を建てる所を整地し、バラックを建て住みました。叔父夫婦が親代わりとなり、兄と私を実の子供のように育ててくれました。親が亡くなって寂しいとかそういう感情は全然ありませんでした。

しかし、成長するにつれ、だんだんと親が恋しくなってきました。姉妹同然に育てられていた従姉妹（いとこ）が小学校から家庭教師がついて勉強しているのを見ると、うらやましく少し寂しかったです。叔父家族とは、私が結婚するまでずっと一緒に暮らしていました。家で家具の製造をしていたので、そこで経理の仕事をしていました。

●結婚、病気について

昔は、被爆者と言うことを隠している人が多く、特に女性は、結婚のことがあるので被爆者であることを隠し、被爆者健康手帳も申請しない人が多くいました。今は助かっていますが、私も手帳交付開始からしばらくたってから、申請しました。結婚について私は、叔父夫婦の決めた相手と結婚するだろうとずっと思っていました。それで、お見合いで結婚したのですが、幸い結婚相手は、私が被爆者と言うことを気にする人ではありませんでした。

結婚の次は、生まれてくる子供のことが心配でした。私は甲状腺のガンです。私の兄も従姉妹もガンになり、結婚して産まれてきた娘は、聴神経腫瘍という病気です。やはり原爆が原因で、病気になったのではないかと心配です。

●平和への思い

子供たちには、よく自分の体験談を話しています。また、一緒に平和記念資料館に行き、原爆が落とされた時の様子も教えています。

昔は、日々の生活に追われて家族の墓参りにもなかなか行けませんでしたが、今は再々行って、皆と一時おしゃべりをして帰ります。もし母が生きていたら親孝行してあげられたのにと思います。だから、母と同年齢の方を見ると、母にできなかった分親孝行したいと思い、放っておけません。

また、大勢の人が犠牲となった中で、今こうして元気でいられることに感謝しています。そして、亡くなった母のことを想うと、子供たちのために元気で長生きしたいと思います。

忘れたくても忘れられない
あの夏の出来事

下竹（しもたけ）　千代子（ちよこ）

●戦時中の暮らし

私は、１９２１年（大正１０年）に広島県山県郡殿賀村（その後の加計町、現在の安芸太田町）で生まれました。

昭和１５、６年ごろからは親元を離れ、筒賀村（現在の安芸太田町）の指導に厳しいことで有名な作法の先生宅に住み込みで、お茶やお花、その他の礼儀作法について教わりました。このことは、その後の人生に大いに役立ったと思います。数年後、その先生が亡くなってからは、筒賀村の教育長に頼まれて、私が教えることになりました。村から講師料をいただき、収入を得ることができました。

そんな中、殿賀村の村長の甥にあたる河本久と知り合い、１９４４年（昭和１９年）５月に結婚しました。私の父が殿賀村の役場に勤めていたので縁があったのです。結婚後は広島市比治山本町の鶴見橋の近くで夫の両親（義父：亀三郎、義母：セキヨ）と４人で暮らしていました。夫は時計商を営んでいましたが、町内に同じ職種の店は複数いらないということで、夫は外へ働きに出ていました。また戦況が厳しく、専業主婦は１軒に２人はいらない、女性も働けという時代だったので、私も結婚した翌月から義父が勤めていた霞町の陸軍兵器廠に勤めました。

●原爆投下前

嫁ぎ先の故郷も殿賀村でした。義母は８月３日から殿賀村に行く予定でしたが、その日の朝になって急に、「あなたが先に行ってきなさい。私はお盆に１０日ほど行かせてもらうから」と言われ、私が８月３日から５日まで殿賀村の実家に行くことになりました。鶴見橋を渡っていると義母が追いかけてきて、状態の良い日傘を差し出し、広島にあると空襲でどうなるかわからないから実家に置いておくように言いました。そして「お父さんやお母さんによろしく。約

束の時（５日）には帰ってよ」というのが義母の最期の言葉になりました。しかし、その時にはそれが最期になるとは思いもしませんでした。実家にいると少しでも長くいたい、ゆっくりしたいと思うのが常で、５日の夜の最終バスで帰ることにしました。ところが、いざ帰ろうとすると、乗車を拒否され、仕方なく実家に戻りました。父は、私が帰らなかったことを知ると、「約束を守らないような者はだめだ。河本のお父さんやお母さんに申し訳ない」と厳しくしかり、河本の家にあてて、明日は必ず千代子を帰らせる旨の電報を打ちました。

●８月６日から８月９日

翌日（８月６日）、約束の日を過ぎているのだから、朝早くに出発すればいいものを、その日もゆっくりしていました。もし朝早くに家を出ていたら、もう少し近いところで原爆に遭っていたと思います。そして、８時１５分になりました。何か光ったように感じた後、地響きがするぐらい、とても大きな音がしました。そのうち『広島市』の文字が入った、破れたり、焦げたりした紙切れがたくさん飛んで来たので、これはなにか広島で起きたなと思いました。しばらくするとやはり広島で大変なことが起こったようだという知らせが入りました。私は広島に帰ろうとしましたが、とても女、子供が歩ける状態ではないらしいということで、先に父が広島市内に様子を見に、歩いて行きました。まず私たちが住んでいた比治山本町の家に行くと、全部焼けていたそうです。その焼け跡に、兵器廠（へいきしょう）の寮にいるという立札があったので、父はそこに行き、夫や義父母に会うことができました。しかし義母は大ヤケドで苦しみ、すでに虫の息だったようです。父は、夫と義父母の状況を確認した後、東白島町（ひがしはくしまちょう）の叔父の様子も見に行ったようです。叔父の家は全壊し、己斐（こい）あたりに避難していました。学徒動員で建物疎開作業に従事していたいとこは亡くなっていました。

父は、あちこち歩きまわって殿賀村に戻ってきました。夫たちが兵器廠（へいきしょう）の寮

にいるということを父から聞いた私は、８月８日の朝、バスと汽車（可部線）を乗り継いで広島市内に入りました。途中、可部駅前の広場には、今にも息が絶えそうな負傷者がたくさん寝かされていました。枕もとには缶詰が１つ置いてあるだけ。家族を捜しに来た人がのぞき込んで名前を呼びますが、返事をする気力のある人はいませんでした。たくさんの負傷者を目にした私は、家族のことが心配でなりませんでした。

汽車は三滝駅あたりで止まり、乗客は降ろされました。そこから、梅干しや米など実家からもらって来た食料を担いで、兵器廠の寮へと向かいました。しかしあたり一面焼け野原でどちらへ行ったらよいかわからず、目標にしようと思っていた建物も見当たらず、歩き回りました。火が燃えているから人がいるだろうと思い、道を聞くため近寄ってみると、死体を焼いている火でした。橋の上だろうと道のほとりだろうと田んぼの中だろうと関係なく、あちこちで焼いていました。死体を焼く光景を目にしても、なにも感じず、臭いとも思いませんでした。感覚が麻痺していたのだと思います。

９日の夜中３時に、やっと兵器廠の寮にたどり着きました。義母はすでに亡くなっていましたが、亡くなって数時間しかたっていなかったので、まだ遺体が傍らにありました。義母は原爆が落ちた時、畑に出ていたので、ほとんど全身をヤケドし、あごや胸が焼けおち、見るも無残な姿でした。義父によると、それまでしていたうなり声がしなくなったから、ろうそくの明かりをつけて見てみたら、亡くなっていたそうです。翌日、義父が木箱を作り、その中に義母を入れて、芋畑で焼きました。

●夫の死

夫は家の中にいたので、ヤケドは全くしておらず、目に見えるようなケガもありませんでした。畑で作業していた義母の悲鳴を聞き、助けるため外に出た

とのことでした。

８月１５日の朝５時に目が覚めました。夫に「まだ起きなくてもいいじゃないか」と言われましたが、義母の初七日だからだんごでも作ってお供えしようと思い、支度しました。そして、私たち３人で食べるためのおかゆも用意し、夫に食べさせようとしたら返事がありませんでした。３畳の部屋に義父と並んで寝ていたのですが、義父も気がつかないうちに夫は亡くなっていたのです。遺体にハエが寄ってくるので、少しでも早く火葬するため、１５日に亡くなったのですが、１４日に亡くなったものとして死亡届を出し、その日のうちに火葬しました。その時も義父が箱を作ってくれ、夫を入れて焼きました。義父は、義母を火葬する時に火をつけたことがとても辛(つら)かったようで、この時は私がつけるよう頼まれました。しかし、その日の朝まで息をしていた者へ火をつけるのは抵抗がありました。それでも焼かなければならないので火をつけましたが、燃え出すとそばにいることができませんでした。その場を離れようとしても、足がふらふらして立てず、歩けませんでした。仕方がないのではって帰りましたが、あちこちで死体を焼いていたので、まだ地面が熱く、手のひらやひざ、足などをヤケドしました。

翌日、夫の骨を拾いに行きましたが、すぐ上空を敵機が飛んでいたのに警戒警報が鳴らないので、不思議に思っていました。私は終戦になったことをしばらくの間知らなかったのです。

●自害用青酸カリ

兵器廠(へいきしょう)では、女性全員に青酸カリを渡していました。アメリカの兵隊に辱めを受けるようなことがあったらみっともないから、その時にはこれを飲むようにということで渡されていたものです。夫が亡くなった時、私はもう用なしだと思って、その青酸カリを飲もうと思いました。義父が役所に死亡届を出しに

行っているあいだ、青酸カリを口にふくもうと水まで飲みましたが、その義父が帰って来た時私まで死んでいたらどう思うだろうかというのが頭をよぎりました。私が死んだらだめだ、義父を看病する義務があると思い、青酸カリを飲むのをやめました。私は、長かった髪を切り、「ごめんね、私がお供をできないからね。私の気持ちですからね」と言って夫と一緒に焼きました。義父がいなかったら青酸カリを飲んでいたと思います。

殿賀村に帰ってからもその青酸カリを大事に持っていたら、手元にあったら何をするか分からないと言って、１人の弟がそれを焼きました。あの焼けるにおいは、何とも言えませんでした。

●義父の死

義父は、兵器廠（へいきしょう）にいる時に被爆し、背中を大ヤケドしていました。そのため、寝る時はいつも伏せて寝ていました。夫の死後、その義父と一緒に殿賀村に行くつもりでした。しかし、義父は８月２５日に亡くなりました。私はまだ２４歳でしたが、義母、夫、義父を失い、一人ぼっちになりました。もう死んでもいいと思いました。でも、私が責任をもって３人の骨を郷里に持ち帰り、家族に届けなければという思いで死ねませんでした。

●殿賀村へ

ようやく９月６日に夫と義父母の遺骨を持ち、殿賀村に帰りました。夫の親類宅で葬式をしてくださいました。そのころの私は、とてもやせて、体調も思わしくなかったので、親兄弟みんなが守ってくれました。ここまで生きているのも、みんなのおかげだと思います。親兄弟というものは本当に有り難いものです。食事もみんなが食べていたらつられて食べていました。昔は食物がない時代でしたから、食べたくないと思っても、食べなきゃ損だという気になって、

無理に食べていました。それだからよかったのだと思います。

殿賀村に帰ってからも、何度か広島市内に父と出ましたが、ある時、広島市内で外国人の捕虜だった人に追いかけられたことがあります。それまでに歩き回っていたので、疲れきっているうえに、枕崎台風の後で、道がないところを進まなければなりませんでした。必死に走って逃げましたが、とても怖くて、忘れることができません。

●再婚

昭和３２年に再婚しました。子供が３人いる方で一番下の子が２歳の時でした。それまで私は子供を育てたことがないので、はじめは断るつもりでした。しかし、子供に会うと、ものすごくかわいくて、自分はもう子供は生まれそうにないし、この子を育てたら楽しいだろうと思って結婚することにしました。

●健康状態

これまで、体調面で不安になることは多々ありました。あらゆる医者にかかっています。抜歯の時は血が止まらないため、近所の歯科に行くと、内科の先生を連れてくるように言われます。

７年ほど前（２００１年、平成１３年）には卵巣がんの手術を受けました。腸にも転移していて、腸を５０センチほど切るという大手術でした。卵巣がんは治りにくい病気で、おまけに腸にまで転移していて、助かったのが不思議なぐらいです。

卵巣がんの時、食べ物が苦く感じていましたが、また最近苦く感じはじめたので病院へ行ったところ、腸閉塞と診断され入院しました。

●被爆して

私は原爆で直接ヤケドをしたわけではありませんでしたが、ハエが手や足、背中など、体のあちこちに卵をうえつけ、皮膚の中からウジがいっぱい出てきました。その時はとても痛く、アブにさされたかのようでした。その跡が今でも背中にいっぱいあるので、私は温泉などの共同風呂に入りたくありません。

病院の先生にも背中を見られると、なにがあったのかと聞かれます。被爆のせいだと答えると、被爆した時背中を出していたのかと言われたりもしましたが、そんなことではないのです。

平和ということは大事なことで、戦争はしてはいけないと思います。家の中でも、もめごとがあったら面白くないのですから、もめごとのないようにしなければいけません。

よ か っ た の う

みやち　としお
宮地　稔雄

●当時の生活

私は、大正６年に御調郡中庄村（現在の尾道市因島中庄町）で生まれました。父は中庄郵便局に勤め、母は専業主婦でしたが少しばかりの畑を耕していました。私は、３人の姉の次に長男として生まれ、２年後には弟が生まれました。大正１３年に、妹が生まれましたがすぐに亡くなり、その後母も亡くなってしまいました。それからは、父と私の２人で暮らしていました。

昭和１４年に召集を受け、第５師団野砲兵第５連隊に配属されました。分隊長として３年間、ベトナムや中国の各地を転戦しました。退役後は、いとこの経営する丸柏百貨店光支店に勤めました。昭和１８年には、父方の祖父が経営する宮地鋼業の光支店に転職しました。転職の理由は、本社の場所が父の家から近く、親の世話をするには都合が良いと考えたからです。転職したころに結婚し、昭和１９年４月には長男が生まれました。

昭和２０年４月に２度目の召集を受け、この時、妻子を因島に疎開させました。今度の配属先も野砲兵第５連隊でしたが、今度は連隊本部で兵籍係として勤務しました。主力部隊は内地防衛のため各地へ派遣され、本部に残っている兵隊はわずかでした。その中で兵籍係は、軍隊の名簿を作成したり、軍隊手帳を配付したりすることなどが主な仕事で、軍事演習もありませんでした。

上官の岡田軍曹は、神石郡小畠村（現在の神石郡神石高原町）の出身で、とても立派な人物でした。同じ部屋に２人だけの勤務だったので、とてもかわいがってもらいました。

昭和２０年６月には、部隊の名称が、中国軍管区砲兵補充隊（中国第１１１部隊）と変更されました。部隊は広島城の西側にあり、お堀を囲むように２階建ての兵舎が４～５棟ほど建てられ、４個中隊が駐屯していました。

●被爆前の状況

私は、除隊後に、前勤務先へ復帰するつもりでした。会社も同じつもりだったようで、社長から「重要な打合せの会議をするので、光市に来てもらいたい」との手紙が部隊に届きました。しかし、私としては、前勤務先とはいえ親せきですから、その用務を口実に休んだと思われるのが嫌で、気兼ねをして外出許可を頼めずにいました。その時、岡田軍曹が大変親切に「心配するな、許可を取ってやるから安心しろ」と言ってくれました。そのおかげで特別に外出許可を取ることができ、８月５日の日曜日は、光市に行っておりました。翌日の８月６日月曜日は、朝９時に広島駅に着く予定の汽車に乗り、部隊へ戻ることで了解を取っていました。

８月６日は、朝４時に起きて朝食を取り、光駅から汽車に乗りました。原爆投下時刻の８時１５分は、岩国(いわくに)駅の手前あたりだったと思います。汽車が走るごう音のせいで外の音はほとんど聞こえず､爆発音には気が付きませんでした。しかし、乗客たちが「広島の空にアドバルーンのような大きな煙が上がっている」と言って、一斉に進行方向右側の窓から見上げていました。車内放送もなく、何が何だかわからないまま、汽車はそのまま走り続け、突然五日市(いつかいち)駅で止まりました。前の汽車も止まっていて、これ以上広島方面には行けないとのことで、乗客全員が下車を命じられました。私は、９時に広島駅に着きすぐに部隊へ戻ると約束していたので、途方にくれました。

五日市駅前は、機関車のはき出す黒い煙で、まるで夜のように暗くなっていました。人間が動くのがかすかにわかるくらいです。しばらくたつと黒い煙が晴れてきて、近くに憲兵隊のトラックが止まっていることに気が付きました。「部隊に帰りたいので、広島城まで乗せてほしい」と頼んだところ、ちょうど何かの用務が済んだところであったらしく、快諾してくれました。伍長(ごちょう)と軍曹の２人連れでしたが、外傷もなく大変元気だったので、原爆を直接受けてはい

なかったのでしょう。もし、今でも御存命であれば、ぜひお礼を言いたいと思っています。

●被爆後の町の様子

五日市から広島までどの道を通ったか正確には思い出せませんが、田んぼの中の一本道を走ったように思います。その道を、避難民がどんどん流れるように逃れていました。広島市内に入ってからは、電車通りを走りました。みんなが避難してしまった後なのか、市内には人気がなく、犬や猫さえも見かけませんでした。

広島城まで行くように頼んでいましたが、相生橋（あいおいばし）の手前で降ろされました。相生橋から部隊までは、目と鼻の先です。その先は歩いて行こうと思いましたが、道路が焼けて熱く、歩くことができません。編上靴に脚絆（きゃはん）も巻いていましたが、１メートルも進むことができず、相生橋の前で立ち止まるしかありませんでした。

相生橋で、５０センチ進むとまた５０センチ戻るというようなことを繰り返しているうちに、１時間くらい経過したでしょうか。突然、針のように肌につき刺さるくらいの激しい雨が降り始めました。黒い色の雨で、あたりは油をまいたようになりましたが、ぬれた顔を手でぬぐってみても、油っぽい感じはしませんでした。焼け野原で雨宿りするところもなく、全身ずぶぬれとなり、雨がやむのを待ちました。

雨がやむと、先ほどとは打って変わってすっかり涼しくなり、秋のようでした。熱かった道路は雨で冷やされて、歩けるようになっていました。

部隊に帰ってみると、兵舎は無残な状態です。建物はみな砕け散り、焼けて灰となり、雨に洗い流されて何もなかったようにきれいになっていました。

岡田軍曹は、全身やけどで瀕死（ひんし）の状態でしたが、まだ息がありました。やけ

どで人相が変わっていて、私の方からは岡田軍曹だとわかりませんでしたが、岡田軍曹が「宮地、よかったのう」と声をかけてくれてわかりました。いったん別れ、夕方再びその場所へ戻って来た時には、岡田軍曹はどこかに運ばれ、既にそこにはいませんでした。

記憶が定かではありませんが、おそらく８月６日の黒い雨が降った直後、横川（よこがわ）の対岸あたりで、第２総軍司令部の畑俊六（はたしゅんろく）大将に出会いました。そばに付いている副官から、「畑大将をぬらさないように、背負って天満川を渡れ」と命令されました。畑大将は小柄な人で、命令通り背負って川を渡りましたが、重くは感じませんでした。

●救援活動

西練兵場には、原爆から生き残った兵隊が９０名ほど集まりました。それらの兵隊が、死体の焼却作業にあたりました。昨日は２５０人、今日は３００人というように、おびただしい数の死体を焼きました。

作業の中で特に印象に残っていることは、広島城の階段のところに、アメリカ兵の死体が２体転がっていたことです。当時広島城の近くの建物内に、アメリカ軍の捕虜が捕らえられていたので、そのうちの２名だろうと思います。

８月６日当日は食べる物がなく、私は部下３０名を連れて、乾パンを受け取るため、市役所へ交渉に行きました。予想に反して、市役所側とけんか腰の言い合いとなり、乾パンを受け取ることはできませんでした。その日はしかたなく、砂糖をお湯に溶かして飲み、空腹を紛らせました。８月７日以降は、市外からの救援隊の活動により、おにぎりや乾パンの配給を受けられました。

８月末まで、救援活動は続けられましたが、その間ずっと野宿でした。

８月３１日に、やっと部隊の解散命令が出ました。解散の時、軍の倉庫に残る様々な物資が、兵隊に配られました。私は、軍服や毛布をもらいました。農

家出身者の中には、軍馬をもらい、馬に乗って家に帰る者もいました。

９月１日、糸崎港(いとさき)から迎えの船に乗り、因島に帰りました。

●病気について

因島に帰ってから約２か月後、畑の中で小便をしたところ、茶色い尿が１升くらい出て驚きました。その後も茶色い尿が続き、さらに翌年になって、胃腸障害となり入院しました。その後、肝臓も痛めて入院しました。平成１０年には膀胱(ぼうこう)がんとなり入院し、現在も治療を続けています。

被爆者健康手帳は、昭和３５年９月に取得しました。取得前は、手帳を取るべきかどうかいろいろ悩みましたが、市役所の勧めもあり受け取りました。その後、被爆が原因と思われる様々な病気にかかる度に、手帳を取っていて良かったと思いました。

●戦後の生活

戦後は、因島で小さな雑貨店を始めました。田舎の雑貨店なので、食料品を売るだけでなく、精米、精麦、精油もしますし、後には家電製品も扱いました。生活は決して楽ではありませんでしたが、どうにかやり繰りし、子供たちを大学まで行かせることができました。

昭和２１年に長女が生まれましたが、母子ともにすぐに亡くなりました。昭和２２年に現在の妻と再婚し、次男、三男、次女が生まれました。戦後に生まれた子供たちはみな体が弱く、私の被爆の影響ではないかと心配でした。妻は次女に対して、縁談に差し支えるので被爆２世だということは口にしないように言っていたようです。

●被爆死した上官について

戦争があのまま続いていたら、日本は大変な状態になっていたと思います。私は、多くの犠牲の上に、今の平和があると思っています。

私が直接被爆を免れこうして生きていられるのは、あの時親切に外出許可を取ってくれた岡田軍曹のおかげです。８月６日に会い、「宮地、よかったのう」と声をかけていただいたのを最後に消息がわからず、ずっと気にかかっていました。「ぜひ、感謝の気持ちを伝えたい」その私の気持ちを察して、子供たちがインターネットで調べ、さらにお寺１軒１軒に電話をかけて聞き、岡田軍曹のお墓の場所を探し出してくれました。

平成１９年に、家族全員で、岡田軍曹のお墓を訪ねました。お墓を訪ねて、感謝の気持ちを岡田軍曹に伝え、やっと胸のつかえが下りました。

平和への思いを次世代に

前土居（まえどい）　時男（ときお）

●被爆前の生活

昭和２０年当時、私は母ヒサヨと２人の姉と一緒に楠木町一丁目に住んでいました。私は、三篠国民学校高等科１年生でしたが、当時は学生といっても工場などに動員されて作業に従事する毎日で、学校での授業はありませんでした。私は級友４０名と共に、三篠本町三丁目にあった日産自動車に動員されていました。２人の姉もそれぞれ、一枝は貯金局、鶴江は被服支廠に勤めていました。

●８月６日

その日の朝も私は動員先である日産自動車にいました。一緒に動員された級友たちは、それぞれ分散して工場で作業をし、私は事務室で工場から注文があれば部品を運ぶなどの雑用をしていました。その時も、工場から部品のビスを持ってくるように連絡があったため、２箱手に持ち事務室を出て、建物の奥にあった工場へ向かって歩き始めました。突然ぶわっとガスバーナーの炎のような青白い光に包まれると同時に視界が閉ざされ、体が空中に浮くのを感じました。警戒警報は解除中で、完全に無防備な状態でしたが、瞬間的に爆撃を受けたと思いました。私はとっさに「ああ、これで死ぬんだな」と思いました。

何分ぐらい過ぎたのか定かではありませんが、意識が戻り地面に横たわっていることに気付きました。しばらくすると、段々と霧が晴れるように視界が開けてきましたので、「生きている」とその時に思いました。

私は、近くに落ちていたガスボンベの上に落ちたらしく、手を擦りむいてケガをしていました。後から思えば、被爆時の私の姿は、坊主頭で丸首の半そでシャツに半ズボンを着用しているだけだったので、露出部分はすべてひどいヤケドを負っていたはずなのですが、その時すぐには自分の状況を把握できず、痛みさえ感じませんでした。一緒に動員されていた級友たちの姿も見えず、家

族のことが心配になり帰宅することにしました。歩き始めると工場の大きな門が倒れて、３人くらいが下敷きになっているところに出くわしました。周囲にいた人と協力して引っぱり出すことができ、その後皆「逃げよう、逃げよう」と言って工場から外へ出ました。

●被爆後の様子

町はすべて倒壊した建物や塀で覆われ、道も見えない状況でした。あちこちでボヤのような煙がくすぶり、道行く人は皆ヤケドを負い、子供を抱えて逃げる人もいました。ガレキや倒れて重なった木材の上を歩くと、飛び出たクギが靴底を貫いてぶつっと足に刺さりましたが、その時は必死で痛いとも何とも感じません。足元のガレキの下からは、「助けてくれ」とうめき声がかすかに聞こえてきましたが、地獄絵図のような状況の下で、私自身が半狂乱になっており、助けを求める声に何もできずとにかく自宅へと向かいました。

自宅へたどり着くと、家は完全に倒壊していました。母と姉がいるはずでしたが姿が見えません。まだ１２歳だった私は「僕はもうこれで一人ぼっちになった」と急に不安感に覆われ、「もうだめだ」とぼう然と立ち尽くしてしばらく崩れ落ちた自宅を眺めていました。すると周囲から「火が回るから逃げろ」と声をかけられ、ようやく逃げる決心がつきました。あらかじめ家族で決めていた郊外の避難場所に向かって歩いていると、同じ工場に動員されていた級友の中村(なかむら)君と偶然出会いました。彼は三滝町(みたきまち)にある親せき宅へ避難する途中で「一緒に行こう」と私を誘ってくれました。

三滝町は、山手にあり被害が少なかったようで、家の窓ガラスが割れている程度でした。親せきのおばさんが、「助かってよかった、よかった」と言って、おむすびを出してくれましたが、食欲がなく食べられませんでした。そのころから一息ついたせいか、体に痛みを感じるようになり、自分の異変に気づきま

した。衣服で覆われていない部分はすべてヤケドをして、体のあちこちに大きな水ぶくれができて「ぽやん、ぽやん」と波打つほど大きくなっていました。帽子もかぶっていませんでしたので頭もヤケドでズクズクと痛みました。体の３分の１のヤケドを負うと命を落とすと言いますが、それ以上だったと思います。

昼前ごろだったと思いますが、雨が降り始めました。火照った体に気持ちよく、しばらく雨に打たれていました。流れる雨水をよく見ると油のようにギラギラと輝いています。その時は全くわかりませんでしたが、今思えばあれが放射能を含んだ「黒い雨」だったのです。

その後、避難場所である安村（やすむら）（現在の広島市安佐南区）の学校へ向かうため、中村君に別れを告げ再び歩き始めました。体が熱くてたまらず、道中近くの畑になっているキュウリを絞り、汁をヤケドに塗りながら歩き続けました。

ようやく学校へ着くと救護所が開設されており、ケガ人がずらりと地面にマグロを並べたように横たわっていました。そこで初めて診察してもらいましたが、食用油を患部に塗る程度の治療でした。あふれるほど多数の被災者が学校にいたので、また新たに別の避難場所が割り当てられました。移動していると奇遇にも姉の鶴江と出会うことができました。自宅で被爆した姉は頭部にケガをしたらしく包帯を巻いていました。ようやく親族に会うことができたので私は「ああ、一人じゃなかったんだなあ」と安心しました。姉から母も無事と聞き、母の元へ向かいました。自宅縁側で被爆した母は、足にえぐられたような傷と顔面にヤケドを負っていました。その後、貯金局で勤務中に被爆した姉の一枝とも同地で合流することができました。

そのまま私たちは安村で終戦を迎えました。「もう戦争に行かなくていいんだ」という安ど感に包まれたことを覚えています。安村には２週間ほど滞在して、その後、父の故郷である高田郡郷野村（たかたぐんごうのむら）（現在の安芸高田市（あきたかたし））の親せき宅に

転居することになりました。

私の体調は悪化の一途で、周囲では「もう長くはない」という話が出ていたようです。郷野村には医者が出張のような形で来ていたので、大八車で運ばれ治療を受けに行きました。そこで初めてヤケド用の白い薬を付けてもらい、ようやく治療らしい治療を受けることができました。治療を受けるにも、ヤケドがひどいので衣服を脱ぐことができず、はさみで切るしかありませんでした。高熱にうなされ、トイレにも行けず人に抱えてもらい用を足していました。母は、自分のケガをおして、末っ子で唯一の息子だった私の看病をしてくれました。「暑いだろう、暑いだろう」と言って夜も寝ずにずっとうちわで、あおいでくれたのを覚えています。ヤケドが治りかけたころ、鼻血が頻繁に出ました。出血が治まらず医師に注射で止血してもらうこともありました。

私は徐々に回復し、地元の学校に通い始めました。その学校には同じように被爆後、広島市内の学校から転校してきた生徒が３人くらいいました。

９月ごろ、私はどうしても広島の様子が気になり一人でバスに乗って広島市内へと向かいました。自宅跡近くでは、近所の方がバラック小屋を建てて生活しており、話をすることもできました。ほかにも雨露をしのぐ程度の小屋があちこちに建っていました。私が被爆した日産自動車へ行くと、偶然工場長に出会い「元気だったか」と声を掛けられ、被爆時の話を聞くことができました。事務室で被爆したある女子事務員は目が飛び出ていたと聞き、被爆直前まで同じ事務所にいた私は改めて恐ろしく感じました。同じ工場に動員されていた４０名の級友とはその後会う機会もなく、今も消息を把握することができません。

●生活再建

２、３年後、田舎では就職口がないので広島市内へ再び生活の拠点を移しました。学歴がないために、就職するまで本当に苦労しました。しかし食べてい

くために、新聞配達をしたり建築現場で働いたり、とにかく何でもやりました。

２３歳の時に結婚することになり、妻には全部知っておいてほしいという気持ちで、被爆していることを打ち明けました。妻は承知の上で結婚を承諾してくれました。当時は、新聞などで被爆者の後遺症について盛んに報道されていましたが、一切気にしないように努めていました。２７歳の時に長男が生まれ、同じ年、義兄の紹介で東洋工業（現在のマツダ）に就職しました。それまでは転職を繰り返していましたが、義兄からは辛抱して頑張るようにと励まされ、私も子供のために頑張ろうと決意を新たにして勤め始めました。

●健康面への不安

一緒に夜勤をする同僚と話していると、相生橋（あいおいばし）で被爆したという人がいました。ほぼ爆心直下ですし、話を聞いて驚きました。彼のところにはＡＢＣＣ（原爆傷害調査委員会）から身体調査を目的とした依頼が来ていました。彼とは同じ被爆者として、お互い気になることなどを話していました。しかし彼は体調を崩して入院し、一度職場に復帰しましたが５０歳で亡くなりました。私も、常に健康への不安を抱えていますので、今まで生きてこられたのが不思議なくらいに思います。私はその後、５５歳まで勤め退職しました。

●平和への思い

私が今回被爆体験を語ろうと決意した理由は、年齢を重ねるにつれて、体力の衰えを感じ、今の間に私の体験を若い世代に伝えておきたいという気持ちが強くなってきたからです。今の若い人は、昔のように強制的に戦場に送られることもなく、自由奔放に好きなことができますが、今では考えられないことが６４年前に現実に起きていたこと、若くして命を失った人たちの思いや、一世代前の苦労を少しでも理解してもらえればと思います。

そして、もう二度と私が体験したようなことが起きないように、核廃絶に向けて若い世代に平和運動を推し進めてほしいと思います。だれが同じような目に遭っても楽しいことなんてありません。私が生きている間にぜひ核廃絶の世界が訪れてほしいと思います。

消えない戦争の傷

ふじえ　きょうこ
藤恵　京子

●被爆前の状況

そのころ、私は宇品国民学校の４年生でした。父は当時４１歳で、陸軍船舶司令部に所属し、１年のほとんどの期間を、軍用船に乗り外地へ出ており、宇品町（現在の広島市南区）の家には半年に１度帰ってくる程度でした。母は当時３１歳で、助産師をしていたので、市内が危険になっても、患者さんがいるため、疎開はできなかったようです。１歳５カ月の妹と、８０歳になる父方の祖母も、家に居ました。また、朝鮮半島で造船所を営んでいる伯父が、息子を日本の学校に通わせたいということで、いとこを私の家で預かっていました。

●学童疎開の思い出

昭和２０年の４月ごろ、宇品国民学校の３年生から６年生までの児童は、県北の三次町、作木村、布野村（現在の三次市）に分散して学童疎開することになり、私は三次町の常順寺に行きました。

お寺での食事は、大豆ばかりでした。ごはんは、大豆に米粒が付いたようなもので、おやつも大豆です。ある時、お寺の中学生の息子さんに持たせる弁当のおにぎりがなくなる事件がありました。私たち疎開児童は、全員お寺の本堂に座らされて、「だれか、とった者は白状しなさい」と言われました。

お寺の近くに巴橋という大きな橋があり、その横に神社があります。そこには大きな桜の木があって、サクランボがなりました。上級生は、木に登り、サクランボを取って食べていました。何も知らない私は、上級生に呼ばれ、木の下で外向きに立たされ、見張り役をさせられました。ちょうどその時、おじさんが怒鳴ってきて、私を捕まえたのです。そして、木の上に向かって「みんな下りてこい」と言い、上級生たちも下りて来ました。手をつかまれて泣いている私に、おじさんは「どこの子か」と聞き、私が「常順寺です」と答えると、「よしっ」と手を離してくれました。そして、おじさんから「ここの下には、

タマネギやいろんなものが植えてある。それを踏みつけたら食べられなくなるだろう。絶対にこういうことをしてはいけない。もう、泣くのはやめなさい」と言われました。その日の夕方、そのおじさんが、蒸したお芋などの食べ物を、私たちに届けてくれました。怖かったけれど、とても親切な人だと思いました。きっと、私たちがおなかをすかせてサクランボを取っていると、かわいそうに思ってくださったのでしょう。

疎開先には、時々、児童の親からお菓子などが送られてきました。しかし、それらが私たちの口に入ることはありません。私の母も、大豆をいってアメで固めたものなどを送ってくれましたが、全部先生に没収されました。上級生の話では、みんな先生のおなかに入っていたんじゃないかとのことです。

シラミもたくさんわいて、大変でした。新聞を広げて、その上で頭をすきます。血を吸って黒くなったシラミを、みんなでプチンプチンとつぶしました。着ているシャツは、お寺の縁側の日当たりの良いところに広げて干しました。

●８月６日

原爆投下のちょうど１週間前に、父が外地から戻って来たので、急きょ、私も自宅に帰りました。そして、８月５日には疎開先に戻る予定でしたが、汽車の切符が取れず、６日になりました。

８月６日の朝、母は妹を背負って、広島駅まで、私を見送ってくれました。近所のおばあさんが、三次に疎開している孫に会いに行くというので、私と一緒に汽車に乗りました。芸備線（げいびせん）に乗り、進行方向である三次の方角へ背中を向けて座っていると、最初のトンネルに入る手前で、落下傘が３つ見えました。そして、そのまま汽車はトンネルに入り、その瞬間、爆弾がさく裂したのです。

ものすごい衝撃で、耳にダーンと響きました。私は座っていたので大丈夫でしたが、立っていた人は、大人の人でも、後ろにひっくり返って転んでいまし

た。石が詰まったような感じで、耳がよく聞こえません。

トンネルから出ると、原爆の煙が、ものすごくきれいに見えました。一緒にいたおばあさんと「わぁ、すごいねぇ」と言って見ていました。子供ですから、広島がどうなっているかなんて、想像も付きませんでした。

三次に着いた時、おばあさんが「広島は全滅だと、ラジオが言っている」と教えてくれました。しかし、どんな状況かは分からないまま、お昼には、草取りのため学校へ行きました。その時初めて、学校へ、広島の被災者を乗せたトラックが入って来ました。ひどいやけどをした人々が、トラックからどんどん降りて来て、私はびっくりしました。顔にやけどをして、ほっぺたから皮膚が垂れ下がり、それを手の平で支えている人。乳房が全部ちぎれている女の人。竹ぼうきを逆さに持ち、つえの代わりにしてヨロヨロと歩いてくる人。あの光景は今でも忘れられません。怖いというより、ただ驚くばかりでした。

●家族の被爆状況

原爆が落とされて３日ほどたったころ、広島の家族からお寺に連絡が入りました。それから、８月１２日か１３日ごろ、近所の信(のぶ)ちゃんという６年生の男の子と一緒に、汽車に乗って広島へ戻りました。広島駅には、父が迎えに来ていました。父と一緒に、比治山(ひじやま)の横の道を通って、家まで歩きました。その時父から、家族の様子や、「今から７０年は、草木が生えない」という話を聞いたことを覚えています。

家に帰ると、母は、全身にシーツを巻きつけられた状態でした。全身やけどで、やけどからウジがわくため、シーツでくるんでいたようです。妹も、顔全体にやけどをして、真っ黒に焦げていました。手足も、ひどいやけどで、やはりシーツが巻きつけてありました。幼かった妹は、母の姿を見て怖がり、ずっと泣いていました。

原爆が落とされた時、母と妹は、猿猴橋（えんこうばし）の電停で電車を待っていたそうです。その１時間程前、警戒警報が発令された時に、防空頭巾（ぼうくうずきん）を忘れたと言う近所のおばあさんに、母は自分の防空頭巾（ぼうくうずきん）を貸してあげました。そのため、母は、原爆の光をまともに受けたようです。妹は、母の背中に負われていて、左足と左手、顔にやけどを負いました。母は、妹を背中から下ろし、途中あちこちにある防火用水に妹を漬けながら逃げ、広島駅の裏の東練兵場に避難したそうです。

祖母は、自宅で被爆しました。自宅は焼けませんでしたが、建物は相当傷みました。

父といとこは、母と妹を探して、丸２日間市内を歩きまわりました。見つかった時、母は、男か女か分からないくらい、やけどで体が膨れ上がっていたそうです。母は、８月６日の日、たまたま父が外地から送った服地を使って作った服を着て出かけていました。母は、かろうじて焼け残った服の切れはしを、妹の手に、目印として結び付けていたそうです。父といとこが探しに来た時、１歳の妹がいとこに気付き、「あーちゃん」と呼びかけました。そして妹の手の布を見て、２人を見つけることができました。母は「もう私はだめだから、子供だけ連れて帰ってください」と言ったようですが、父は２人を大八車に乗せ、家に連れて帰りました。

●母の死

母は、８月１５日に亡くなりました。遺体は、父が古い木を使って簡単なふたのない棺おけを作り、家の裏の空き地で焼きました。そこでは、みんなが遺体を焼いていたので、そのにおいが全部家の中に入ってきて、臭くって臭くってたまりませんでした。

母の最期の言葉は、祖母に言った「お義母さん、大きいジャガイモが食べたい」です。戦時中は食糧不足で、着物や色々な物を田舎に持って行って、ジャ

ガイモなどの食糧と交換していました。母は、物々交換で手に入れたジャガイモの中から、小さいものを食べていたのでしょう。小さなジャガイモは、えぐ味が強く、今ではとても食べられません。

母の供養のために、灯ろう流しには毎年必ず来ています。大きなジャガイモをゆでてお供えします。今でも大きなジャガイモを見ると、母に食べさせてあげたいなと思います。

●戦後の町の様子

宇品国民学校の上の土手が、広い範囲で焼き場として使われました。まわりをトタンで簡単に囲い、死体を焼いていました。トタンには、死体の頭の位置で穴を開けてあります。私たち子供は、死体の焼けているそばを通って、海へ泳ぎに行っていました。だから、「あっ、今、頭が燃えている」と思ったり、骨もたくさん踏んづけたりしながら通りました。私が、小学校６年生になるころまで、その辺りは焼き場として使われていたと思います。

戦後は、本当に情けなく惨めな生活でしたが、自分の家だけでなく、当時はみんな同じような生活でした。

●妹の戦後

母と共に被爆した妹は、助かりました。その時、妹のように幼い年で助かったのは奇跡だと言われました。妹は、みんなから「助かってよかった、生きていてよかった」という言葉ばかりを聞いて育ちました。

しかし、妹の足には、ひどいケロイドが残り、変形してしまいました。靴が履けないので、ずっと下駄（げた）を履いて過ごしました。当時は下駄（げた）を履いている人も多かったので、普段は平気でしたが、遠足や運動会の時には、下駄（げた）が履けないので困ります。しかたなく軍足（ぐんそく）を２枚重ねて履いて行きました。

足のことが原因で、妹は、ひどいいじめに遭うようになりました。当時は、原爆の病気は伝染するとうわさされていたので、妹を指さして「指が腐る」とか「近くで見ると、うつる」とか言う人がいました。原爆から何年もたって、妹が小学校に通うようになってからも、見せ物のように扱われ、遠くから見物に来る人もいました。

けれど、妹は、私や祖母に、人からそんな扱いを受けていることを言いませんでした。自分のつらさを訴えることもなく、ただ「おばあちゃん、生きていてよかったでしょ、私は」と言っていました。幼い時より言われ続けた言葉から、「自分は生きていてよかった。だから、こんなやけどをしても、生きていたからよかった」と考えようとしていたみたいです。最近になって妹の手記を目にしました。その中に「その時は、生きていないほうがよかったと思っていた」と書かれているのを見た時、あらためて本当につらかったんだなと思いました。

足の手術は、１５歳くらいにならないとできないと言われていたので、高校の夏休みに、念願の手術を受けました。妹はいつも、高校に入ったら靴が履けるようになると言って、楽しみにしていました。しかし結局、妹の足は、靴が履けるようにはなりませんでした。おなかとおしりの皮膚を移植し、足の変形も治そうとしましたが、移植した皮膚は黒く変色し、足の小指は３センチ程ずれたままです。手術前「運動靴もちゃんと履けるようになる」と言っていた妹は、６５年たった現在でも、まともに靴は履けません。

小指が擦れて痛いので、運動靴に穴を開けて履きましたが、今度は穴を開けたところが擦れて、傷になりました。妹の足は、血の出ていない日がないくらいでした。血が付くとみんなに汚く思われるからと、歯磨き粉を血の付いたところへ塗っていました。

妹は、原爆病院に入院している時に、原田東岷（はらだとうみん）先生と知り合い、「何か相談

事があったら、いつでも言ってください」と言われたそうです。高校を卒業する際に、原田先生に相談し、ロサンゼルスに住む日本人の牧師さんを紹介していただきました。当時は、妹の高校入学前に父も亡くなっており、わが家にお金の余裕はありませんでした。妹は、高校の先生にアルバイト先を紹介してもらい、一生懸命働いて、２０歳の時にようやく片道分の旅費をため、アメリカに旅立ちました。

牧師さんのところでお世話になりながら、洗濯屋で働いて生活費を稼いでいたようです。いろいろと大変な苦労をしたと思いますが、現在もロサンゼルスで頑張っています。本人は、もう自分は普通に結婚できないと思っていたようですが、向こうで日本人の方と結婚し、３人の子供に恵まれました。

●大阪での出来事

ちょうど妹が足の手術を受けて１週間ぐらいたったころに、私は大阪に住む友達のところへ遊びに行きました。妹が「もう私の容体は安定したから、お姉ちゃん、行っておいで」と言ってくれました。

準急列車で夕方に着いたのですが、友達の家が分からず、近くの交番で尋ねました。若い警察官でしたが、とても親切に１時間近くも私に付いて探してくれました。やっと友達の家が見つかり、「ありがとうございました。本当に助かりました」と言った時、はじめて警察官から「どこから来られたのですか」と聞かれました。私が「広島です」と答えたとたん、その人はパッと１歩下がり「あの原爆の広島ですか」と言われます。「はい」と答えると、「僕は、広島の女性は気持ちが悪い。原爆に遭った広島の女性は」と、何か私がばい菌でもうつすのではないかという表情で言われました。それまで自分では、被爆したことを何とも思っていませんでしたから、ものすごくショックでした。

この出来事は、妹には話していません。大阪の友達には話しましたが、「妹

さんが、そんな話を聞いたらかわいそうだから、絶対に言わないほうがいいよ」と言われました。私も、それからは絶対に、広島の人間だということを他人に言わないようにしています。

●洋服店での出来事

私が、十数年前洋服店で接客していた時の話です。見ず知らずの人が、突然妹の名を言って、「お姉さんですか」と私に聞いて来ました。「そうですよ。なぜ、ご存知なのですか」と聞くと、その人は古江(ふるえ)に住んでいる人でしたが、そんなところまで妹のうわさは届いていたようです。

このことや、大阪での出来事、これまでの色々なこともあり、私は、妹のアメリカ行きに賛成しました。いじめや偏見がある日本を出たい、自分のことを全く知らない土地に行きたいと思うのであれば、それが妹にとって幸せではないかと考えました。

●平和への思い

被爆者の本当の痛みというのは、やはり実際にそういう目に遭っていない人には分からないのではないかと思います。指でも、自分が切って初めて痛いと思う、人が切った分には分からないでしょう。だから伝えていくということは、本当に難しいことだと思います。

戦争は、心の底からの傷です。外傷だけではなく、色々な傷が残り、そして何十年たっても、その傷がうずくのです。妹は、戦争の話、原爆の話をとても嫌がり、そういう話をしていると、小さい時から必ずスッといなくなります。アメリカに渡ってからは、いつも濃いストッキングを履いて傷を隠し、原爆のことは一切言わないで過ごして来ました。

戦争は、絶対にしてはいけません。

私は地獄を見た

くわばら　きみこ
桑原　君子

●被爆前の生活

私は当時１７歳、広島市三篠本町三丁目（現在の西区）に、母、姉と３人で暮らしていました。父は亡くなり、３人の兄がいましたが、長男は結婚して家を出ており、次男と三男は召集され山口県にいました。

私はその頃、広島中央放送局の庶務課に勤めていました。放送局は上流川町（現在の中区幟町）にあり、周囲は建物疎開で家々が取り壊され、広場のようになっていました。放送局は軍に関わる放送も多かったので、窓を補強し空襲に備えていたことを覚えています。

●８月６日

あの日の朝は、警戒警報が出ていたのでなかなか家を出ることができず、出勤するのが遅くなりました。警報が解除になり、放送局に着いたのは８時頃だったと思います。私はいつものように、職場の皆と手分けして掃除を始めました。担当していた局長室に入ると、中庭から「Ｂ２９が飛んでいるよ」という女の人の声が聞こえました。その声が気になって、窓の近くへ行こうと思ったとき、窓の外がぱあっと光りました。それはマッチを擦って火が付く瞬間の光を、もっと大きく激しくしたような、赤い閃光でした。私は、とっさに両手で目と耳を塞いで、その場にしゃがみました。当時は、爆弾が落ちた場合はそうするように教育されていたのです。暗闇の中で、ふわっと無重力状態のようになり、バリバリと体中に、痛いとも何とも言えない異様な感覚が起こって、私はここで死ぬのだろうかと思いました。そのときは気が付きませんでしたが、爆風で粉々になったガラスの破片が、私の顔や左腕に突き刺さり、体中血だらけになっていました。左頬には、今もガラス片が入ったままになっています。

しばらくじっとしていると、廊下の方でかすかに人の声がしました。部屋の中は、暗くて何も見えません。とにかくここから出ようとして、声を頼りに廊

下の方へ進んで行くと、男の人の背中に行き当たりました。ああ、この人と一緒に逃げればよい、私はまだ死んでいないと思って、その人の腰のベルトをしっかりつかんで後に付いて行き、やっと出口付近までたどり着きました。出口には人が集まって来ており、皆で重いドアを開けて、外に出ることができました。辺りは夜明けぐらいの暗さで、空からは爆風で飛んだ物がばらばらと降ってきます。放送局から出てきた人たちは、皆真っ黒な顔で髪は逆立ち、血まみれで、服もちぎれており、お互いに声を聞くまで、誰かわからないような状態でした。

私たちは、放送局を狙って爆弾を落とされ、ひどくやられたのだと思っていました。そこで、近くの中国新聞社のビルにあった、放送局の加入課分室に行こうと、同じ庶務課の女性２、３人と一緒に敷地の外に出ました。そのときはじめて、被害は放送局だけではないことを知りました。周囲の建物は全て倒れ、あちこちから火が出ており、中国新聞社の５、６階にあった分室も、窓からものすごい勢いで炎が噴き出し、燃えています。そのため私たちは、放送局から近い縮景園（しゅっけいえん）へ逃げることにしました。火が迫る中、倒れた家の下敷きになった人が叫ぶ声や、家族を捜している人の声が聞こえましたが、私は自分が逃げることに必死で、どうすることもできませんでした。

縮景園には、多くの人々が避難してきていました。私たちは園内の池に架かる橋を渡り、京橋川の土手に出ました。しかし園内の木々が燃え出し、私たちのいる川土手にも徐々に火の手が迫り、ついに川辺にあった背の高い松の木が、大きな音を立てて燃えはじめました。私たちは川の中に飛び込み、胸まで水につかって状況を見ていると、今度は対岸の大須賀町（おおすがちょう）が燃え出し、その火の粉が次から次へと降ってきます。対岸と、背後に迫る火災が熱くてたまらず、私たちは夕方まで川の中に入ったり、出たりを繰り返していました。

たくさんの人が川土手を目指して逃げてくるので、辺りは座る場所もないほどでした。近くに軍隊があったせいか、兵隊さんの姿が多くありましたが、皆、帽子を被っていた頭の上の方にだけ、お皿のように髪の毛が残っている他は、全身が焼けただれ、もだえ苦しんでいました。赤ちゃんを抱いてじっとしていたお母さんは、上半身がボロボロで、赤ちゃんはもう亡くなっていたのではないかと思います。

やけどやけがをした人たちの、「水をくれ、水をくれ」という声が絶えず聞こえ、「水を飲んではいけない」と叫ぶ人もいました。ひどいやけどを負って、耐えられなくなったのか、川の中へ飛び込む人が大勢いました。飛び込んだ人のほとんどは、水から上がってくることはなく、そのまま流されていきました。上流からもどんどん人が流されてきて、死体で川幅がいっぱいになりました。私たちが川の中にいる間も、次々と近くに流れてくるので、私は死体を手で流れの方へ押し戻しました。そのときは必死だったので、恐ろしいとは感じませんでした。地獄絵図よりも、もっと悲惨な光景を、私はこの目で見たのです。

火災がひどくて移動することができず、私たちは一日中、縮景園の川土手にいました。日が沈む頃、放送局の局員を捜して、救援の小舟が来ました。局員は川の東側にある、東練兵場（ひがしれんぺいじょう）の救護所へ行くことになり、小舟で対岸の砂地へ渡してもらいました。私は、家に１人でいる母のことが心配だったので、救護所へは行かず家に帰りたいと言いました。すると局員の仲間から、「町の方へ戻るなんて、馬鹿なことを言うんじゃないよ」と、強く引き留められました。自宅のある三篠本町は、広島市の西側にあるので、帰るためには燃えている町の中を通らなければなりません。皆に反対されて、私は渋々一緒に行くと言いましたが、隙を見て、そっと皆のそばを離れました。私がいないことに気付いた人たちが呼んでいるのが聞こえましたが、「ごめん」と言って、１人で家を目指しました。

●家への道

局員の仲間と別れて、私は京橋川に架かる常葉橋(ときわばし)のところへ来ました。橋の西側の白島(はくしま)方面からは、けがをした人たちが次々と渡ってきますが、反対方向に向かう人は誰もいません。そのとき、橋を渡ろうとしている２人の鉄道員と出会いました。彼らは横川(よこがわ)駅へ行く途中だというので、私は、「一緒に連れて行ってください」と頼みましたが、「私たちも行けるかどうかわからないのに、あなたを連れて行くことはできない。救護所へ行きなさい」と断られました。しかし私は諦めず、４、５メートル離れてこっそり後ろを付いて行き、火が燃えている中を、彼らが振り返れば立ち止まり、また追いかけるということを繰り返して進みました。私がずっと付いて来るので、彼らも最後には「私たちが通った後を来なさい」と言って、危険な場所を通るときは合図をしてくれました。

私たちは火を避けながら、逓信病院のそばを通り、三篠橋(みささばし)へさしかかりました。橋の上は、両側に負傷した兵隊さんがずらっと座っていて、足の踏み場もないような状態でした。近くにあった二部隊の人たちだったのでしょうか、皆うめき声を上げて、苦しんでいました。その人たちを踏み付けないように、何とか橋を渡り、鉄道の線路に出て、線路伝いに歩き横川駅に着きました。鉄道員の人たちとはここで別れましたが、別れ際に、「気を付けて帰りなさいよ」と言ってくれたことを、覚えています。

●母との再会

１人になった私は、三篠の家を目指して歩きました。辺りはもう暗くなっていましたが、道の両側はまだ燃えていて、激しく炎が上がっているところは、走って通り抜けなければなりませんでした。私の家は、横川から三篠を通って北へ抜ける道路に面しており、やっと帰り着いたとき、家は既に焼けてしまっ

ていましたが、近くの道で、母が立っているのを見つけました。生きていたことがうれしくて、私は母に抱きつき、２人で泣きました。

母は、原爆が投下されたとき、家の２階で鏡台の前に座っていました。２階の部屋は内側に崩れ落ちましたが、母のいた場所は角部屋で、どうにか落ちずにすみました。階段も使えなくなって、外から梯子（はしご）を掛けてもらい、下に降りることができたそうです。

家は午前中は崩れたままでしたが、火災がだんだんと近づいて来て、午後から火事になりました。母は、家が燃えてしまう前に、せめて布団だけでも持ち出そうと外に投げたのですが、避難する人がそれを拾い、被って行ってしまったそうです。また、家の庭を防空壕（ぼうくうごう）のように掘って、着物など大切なものを埋めていましたが、火が回って来ると、そこも燃えました。母は家の前の小川の水を、何度もバケツでくんではかけて火を消し、すぐに掘り出しましたが、中身は大分焼けていました。近所の人に三滝（みたき）へ逃げるように勧められても、私と姉のことが心配で、家が燃えている間は道路を挟んだ向かい側の畑に避難し、ずっと娘の帰りを待っていてくれたのです。

その日の夜は、親子２人で畑の中で野宿をしました。家の前の道路は、夜通し避難してくる人や、救援に向かう人たちが行き交い、私はこれからどうなるのだろうと思いながら、ぼう然とそれを見ていました。夜中に救援隊の人から、おにぎりをもらって母と食べ、寝たのかどうかわからないうちに、夜が明けました。

●姉の捜索

７日も人の流れは途切れませんでしたが、姉のエミコは帰ってきませんでした。母は姉を心配し、「どうしたのだろうか、死んだのだろうか」と言っては泣きました。私はそんな母を見ていられず、明くる日の８日に、近所に住んでい

た姉の友達と一緒に、姉を捜しに出かけました。そこで再び、私は地獄を見ました。

姉は下中町（現在の中区袋町）にあった、広島中央電話局に勤めていました。私は横川から十日市町（現在の中区十日市町一丁目）を通り、電車通り沿いを歩きました。焼け跡はまだ何の整理もされていませんでしたが、電車通りのような広い道であれば、かろうじて通ることができました。町は死体であふれており、気を付けていないと踏んでしまいそうでした。寺町（現在の中区）の方では、馬が一頭、丸く大きく膨れて死んでいました。十日市町のあたりでは、体は黒焦げで両手を広げ、立ったまま動かない人がいました。不思議に思って見ると、その人は、立ったままで亡くなっているのです。あちこちの防火水槽には、何人もの人が頭を突っ込んで、折り重なって死んでいました。道の端は死体で埋まり、中にはまだ息があって、うめき声を上げている人や「水、水」と言う人もいましたが、元気な人は１人もいません。皆衣服は燃え、体は焼けただれ、膨れて、真っ黒な人形のような姿です。もしここに姉が倒れていても、このような状態では、見つけることはできないでしょう。死体をまたぎながら相生橋を渡って、紙屋町（現在の中区）までは行きましたが、それ以上は進むことができず、私たちは三篠へ引き返しました。こんな状況では、姉も生きてはいないだろうと思いました。

ところが被爆から１週間後、姉は１人で帰ってきたのです。姉は電話局で被爆し大けがをしましたが、比治山へ逃げ、その後安芸郡海田市町（現在の海田町）へ運ばれ、救護所に収容されていました。そこで１週間ほど過ごし、広島市内へ救援に行くトラックが出るというのを聞いて、姉は一緒に乗せてくれるように頼みました。重傷者は乗せられないと一度は断られましたが、帰りたい一心で、隙を見てトラックの後ろに飛び乗り、十日市町まで送ってもらったそうです。十日市からとぼとぼと歩いて帰ってきた姉は、服はボロボロ、全身血だら

けで、靴も左右で違う物を履いていました。何も知らない人が見たら、正気ではないと思われるような姿でした。我が家は焼けてしまったので、姉は母の友人宅の隅に寝かせてもらいましたが、そのまま寝込んでしまい、生死の境をさ迷いました。

●姉の看病

姉の体は背中一面にガラスの破片が刺さり、腕の肉はえぐり取られ、ザクロのように裂けていました。私は毎日、針で姉の背中からガラスの破片を取り除きましたが、傷口にはウジがわきました。泊めてもらっているお宅の娘さんも被爆して亡くなり、私たちは迷惑を掛けていることが気になって、自宅の焼け跡に戻ることにしました。一番上の兄が来て、焼けた木材を集めて、雨露がしのげる程度の小屋を建ててくれたので、そこへ移って姉の看病を続けました。寝たきりになってしまった姉は救護所に通うこともできず、人から塗り薬を少し分けてもらうくらいで、満足な治療はできませんでした。髪の毛はすっかり抜けてしまい、血を吐き、もうだめだろうと思うことが何度もありました。母は、毎日山へ行ってドクダミの葉を取ってきて、青いまま煎じてお茶の代わりに姉や私に飲ませました。青いドクダミのお茶はとても臭かったのですが、母は体から毒を出す薬だと言っていました。それがよかったのか、姉は３カ月くらいは立ち上がることもできない状態でしたが、その後回復し、職場へ復帰することもできました。抜けた髪が生えそろうまでは、スカーフと帽子で隠していました。体にはけがの痕が残り、ずっと袖のない服は着られず、今でもえぐれた腕はへこんでいます。

●戦後の生活

終戦は、人から聞いて知りました。戦争が終わったらしいと聞いても、はじめはピンと来ませんでした。幼い頃からの教育で、日本は絶対に負けないと信じ切っていましたし、放送局に勤めていても、勝ったという話ばかりで、負けるということは聞いたことがありませんでした。けれど長崎へも同じような爆弾が落とされたという話を聞き、何度もこんな爆弾を落とされるのだったら、戦争は終わった方がいいと思いました。

放送局は、上流川町の建物が使えなくなったので、安芸郡府中町（ふちゅうちょう）の東洋工業内に移ることになりました。私は姉の看病をしなければならなかったのと、東洋工業は遠く汽車で通わなければならず、その頃は進駐軍が来たばかりで、女性は乱暴されるかもしれないという噂（うわさ）もあったので、放送局の仕事は辞めました。その後は近くの会社に１年ほど勤め、恩師の紹介でまた別の会社にしばらく勤めた後に、結婚しました。

私は８月６日と８日に広島市内を歩きましたが、被爆したことによる大きな病気になったことはありません。そういう病気はいつ出てくるかわからないと言われていますが、私は病気への不安は口にしませんでした。病気になったら、なったときのことです。それよりも、今後どうするかということを、いつも考えるのです。

●平和への思い

私はこれまで、被爆したときのことを、あまり話したくありませんでした。毎年慰霊碑にお参りはしますが、８月６日に避難した縮景園には、その後一度も行ったことがありません。現在の縮景園は美しい庭園ですが、池に架かる丸い橋を見ると、あの日のことが思い出されるため、行きたくないのです。思い出すと涙が浮かび、言葉に詰まってしまいます。

原爆を経験した人の多くが亡くなり、話をできる人は少なくなってきました。私も年を重ねてきましたが、今もはっきりと記憶に残る生き地獄の光景を話すことで、二度と核兵器が使われることがあってはならないのだと、若い人たちにしっかり伝えておきたいと思います。小学生の孫も、戦争や平和に関心を持つようになり、「おばあちゃん、原爆にあったの」と聞いてくるようになりました。もう誰も、こんなつらい思いをすることがない世界になることを、強く願っています。

タイトル	執筆補助事業　「被爆体験記集」
版次	第１版
発行日	２０１４年２月２８日
編集	公益財団法人　広島平和文化センター
発行	厚生労働省
	東京都千代田区霞ヶ関１－２－２
	０３（５２５３）１１１１